

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

| | |
|--------------|-----------------|
| 2024年 5月 31日 | |
| 所属部局・学年 | 野生動物研究センター 修士1年 |
| 氏名 | 島田真優 |

| |
|--|
| 1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域) |
| 大阪府・大阪港～北海道・函館港 |
| 2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験) |
| 海棲哺乳類調査実習 |
| 3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで) |
| 2024年 4月 23日 ～ 2024年 4月 27日 (5日間) |
| 4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏) |
| 京都大学野生動物研究センター海獣班, 三谷曜子教授, 北海道大学練習船「おしよろ丸」 |
| 5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果: 長さ自由) |
| 写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。 |
| 今回の実習では、「おしよろ丸」(写真1)に乗船し、海棲哺乳類の目視調査を行なった。海上でのフィールドワークを経験し、目視調査の手法や注意すべきことを学ぶことができた。 |
|  |
| 写真1 おしよろ丸の外観 |
| ◆ 目視調査の方法 日の出の1時間後～日没1時間前に、アッパーブリッジ(操舵室上部)またはブリッジ(操舵室)において目視調査を行った(写真2)。調査では、肉眼または双眼鏡を用いて海棲哺乳類の手がかりを探した。手がかりは、blow(噴気)、splash(しぶき)、jump(ジャンプ)、body(鯨体)であった。目視調査は天候に影響を受ける可能性があったため、開始時刻から終了時刻まで30分毎に天候記録を行なった。天候記録においては、天候、視界、視程、海氷、見やすさ、反射、海況を記録した。海棲哺乳類の発見時は、対象までの距離、角度、手がかり、発見者、記録者、種名、頭数を記録し、必要に応じてコメントを記入した。 |
|  |
| 写真2 アッパーブリッジでの目視調査の様子。 |

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

◆ 成果

クジラの blow, ハンドウイルカと思われるイルカ, イシイルカの群れ(写真 3)を複数回, オットセイ(写真 5)を発見した。イシイルカの群れの 1 つは, しばらく船の先端近くにできる波に乗ってジャンプを繰り返していた。イシイルカがジャンプする際にできる, 2 つに分岐した水飛沫(ルースターテール)も見ることができた(写真 4)。



写真 3 イシイルカの群れ



写真 4 イシイルカ特有のルースターテール



写真 5 オットセイ

◆ 感想

フィールド調査では体調を万全にした上でのぞむことが大切だと感じた。アッパーブリッジでは急激に変化する天候の影響をもろに受けるため, しっかりと防寒対策, 日焼け対策をする必要があった。また, 双眼鏡を覗くと酔いが酷くなるため, 酔い止めとお菓子が必須であった。

波による飛沫と海棲哺乳類による飛沫の区別が難しく, 第一発見者にはなれなかった。何も発見できない日もあり, 目視調査は根気の要る調査だと思ったが, その分発見した際はとても嬉しかった。水族館でしか鯨類を見たことがなかったため, 大海原でイルカが群れでのびのびと泳いでいる様子を見ることができて感動した。海棲哺乳類以外にもマンボウ(写真 6)やトビウオなどの魚類や, アホウドリ, オオミズナギドリなどの鳥類も発見でき, 動物園や水族館では見られない姿を見ることができた。同時に, 海上ではガスを排出している船が往来し, ゴミがたくさん浮いており, 動物の生息環境を人間が汚染していること

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

を実感し、保全や動物福祉について深く考える機会となった。5日間を通して、大変有意義で貴重な体験をすることができた。



写真6 マンボウ

◆ 船での生活

特に1日目の夜は波が高く、実習生は皆船酔いしていた。普段船酔いしない人でも酔い止めは持っていくべきだと感じた。横になると酔いは治ったが、水面より下にある学生の部屋では波の音が響き、耳栓なしでは寝られない日もあった。2日目以降は目視調査で少し酔ったが、料理人の方が用意してくださった美味しいご飯(写真7)を食べると少し緩和された。一日中地面が揺れている中で慣れないことも多かったが、船員の方々のおかげで安全かつ快適に過ごすことができた。



写真7 ご飯

※メンター（PWS プログラム指導教員）が確認済の報告書を【report@pws.wrc.kyoto-u.ac.jp】宛にご提出ください。

6. その他（特記事項など）

本実習はPWSによりご支援いただきました。ご支援に感謝申し上げます。
実習の引率とご指導をくださった三谷先生、実習のサポートをくださったTAの鈴木さん、北海道大学練習船「おしよろ丸」関係者の皆様に深く感謝申し上げます。